

## 国内での日本語教育と海外での日本語教育 ②

## 関係者の協力と人材育成

天理教語学院は、教育内容も充実し、寮も完備されている。留学生たちは快適に過ごし、日本語教育はもとより天理教の修練や鳴り物の練習に関しても、学校だけでなく、寮でも定期的に行われている。留学生たちへのケアも天理教語学院スタッフ、天理教海外部部長が協力して手厚く行っていると言える。

これ以外に、天理教の海外拠点で行われている日本語教室に天理教青年会及び婦人会が隔年で青年・女子青年を送るプログラムがあり、その派遣前研修を天理教語学院が受け持っている。このプログラムは紆余曲折を経ながらも内容はますます充実し、今に至るまで続けられている。現在は派遣前研修の期間中、宿舎は海外ふるさと寮となり、留学生達と生活を共にしている。青年・女子青年たちは留学生にとっては年齢的にも近く、寄宿生活を共にしながら、言葉だけでなく教理面でもお互いに良い刺激を受けあっているようだ。一方、この青年会・婦人会海外派遣生にとっては留学生と同じ寄宿生活をするので、初めて異文化接触を経験したり、日本語習得のサポート役になる機会もあったりして、お互いに貴重な体験ができるシステムになっていると言える。

青年会・婦人会の海外人材派遣の詳しい内容に関してはまた別の機会に譲るが、天理大学選科初期の頃と比べ、これだけ大きく変わり、試行錯誤を繰り返しながら現在の姿が形作られていったことは、天理教語学院スタッフ、海外部部長だけでなく、留学生の直属教会の担当者の方々など関係する人たちの協力と努力によるものだと思わずにはいられない。これらは、考えてみれば簡単には実現できない理想的なシステムが、長い時間をかけた結果、まさにこのようにして実現していると言えるのではないだろうか。天理教海外部、天理教語学院、天理教青年会、天理教婦人会が協力し合い、人材育成を考え、実現したシステムであるとも感じる。

## 全てが人材育成につながる

私事で恐縮だが、以前に天理教海外部部長、天理教表統領、天理大学学長を歴任された飯降政彦先生から「人材育成よろしく」と自筆で書かれた年賀状をいただき、何度も「人材育成」について考えたことがある。人材育成と一言でいっても、後進である天理教の日本語教育に携わる者の人材育成なのか、はたまた来日して勉強している海外子弟の人材育成のことなのか、海外拠点へ送り出す青年会海外人材派遣生の人材育成のことなのか、と何を具体的に指しているのだろうかと考えたりしたこともある。結局、これら全部なのかと理解し、どれもこれもがんばらなければならないと思ってやってきたのだが、振り返ってみれば天理教の日本語教育を一言で表現するなら、すべてが「人材育成」と言えるのかもしれない。言い換えれば、「陽気ぐらしの世界を実現するための人をつくる」ことなのかとも思っている。

## 陽気ぐらし

一般的に「陽気ぐらしの天理教」と言われているが、天理大学おやさと研究所編『天理教事典第三版』（天理大学出版部、2018年）では、『この世の元始まりは、どろ海であった。月日親神は、この混沌たる様を味気なく思召し、人間を造り、その陽気ぐらしをするのを見て、ともに楽しもうと思いつかれた。』（『天理教教典』25頁）と人間世界創造のゆえんを説かれた。

人間は『陽気ぐらし』という目的のために創造され、今日の人間にまで育て上げられてきたのであり、人生本来の意義は、陽気ぐらしをすることにあるのであって、そこに人間の真生命は実現され、人間は真の幸せを手にすることができるのである。』とある。天理教の一切の教理と実践の道は陽気ぐらしという一点に集中するのであり、その目指す陽気ぐらしとは陽気な心、すなわち明るく勇んだ心で日々を通ることであると述べられている。この陽気ぐらしの世界を実現するためにその人材を育成していくというのが、天理教で行われている日本語教育の根本であるように筆者は考えている。まさにここにこそ、一般的に行われている日本語教育との違いがあるのかと思われる。つまり日本語の習得が目的であれば、プロの優秀な日本語教師を雇えば済む話であるが、究極の目的がそこにあるのではないから、教師養成も自前で育成していかなければならない。先に天理教の日本語教育を一言で表現するなら、「人材育成」と述べたのはこれらの理由からである。

## 国内での日本語教育の目的

天理教での日本語教育の最終目標は、先にも述べたように「原典を通して直接をやの声を摂取する」ことにある。そして日本語を習得したものが原典に親しみ、教を心におさめ、自らの母国語で広く世界に伝えていけるようになることである。天理教では究極の目的は陽気ぐらしの世界を実現することであるが、そのための人材を育成するのが天理大学選科、別科を経て続いている天理教語学院の役割であって、同じように日本語教育を行ってはいても海外の場合は事情が少し違うと言える。海外については次章で述べることにするが、海外の場合は全くの未信者が対象で布教の手段的意味合いが強いと言える。

2018年現在、天理教語学院は24回の卒業式を行い、多くの卒業生を輩出しているが、初期の卒業生の子弟や親族の者が入学している例もかなりある。また海外から参拝に来た卒業生が、子供を天理で学ばせたいといった声を聞くこともある。毎年、新入生が入ってきて、話をすると親が筆者の教え子だったということもけっこうあり、天理教語学院の開校時から勤めてきて、もうそんな時代に入っているのかと思うと感慨深いものがある。1994年に開校して幾多の紆余曲折を経て、いつまで続けられるのだろうかという思いも正直なところあったので、24回も卒業式が行えたことがすごいことだと思える。

天理教では、毎年4月18日に教祖誕生祭、10月26日に秋季大祭が執り行われるが、それに合わせて海外から多くの帰参者が訪れる。天理教海外部では「海外帰参者の夕べ」が催され、遠く海外から帰参された方々に喜んでもらえるように宴を開いている。筆者も係りとして勤めてきたが、卒業生に会える機会でもあり、国で立派に活躍している話を聞くと心からうれしく思う。また天理教では、7月26日～8月4日には「こどもおぢばがえり」という夏の行事が行われるが、ハワイ・アメリカ、韓国、台湾など海外団のお世話取りも卒業生が活躍している。卒業生の中には、海外にある教会を後継し、中心的な役割を担っている者もいる。戦後、地道に続けてきたことが芽を吹いて花が咲いているように感じているのは、ひとり筆者だけでなく、この仕事に携わってきた諸先輩方も同じような気持ちではないかとも思う。